

## 『モモ』試論

福 山 悟

人々は日常生活に必ずしも満足しているわけではない。そこには心の隙がある。この物語に登場する灰色の男たちはそうした心の隙を利用する。今の時間を節約すると輝く未来が待っているとされた人々は、その論理にたやすく籠絡され、次第に自分を見失っていく。そうした人々を助けたのが、モモである。モモと灰色の男たちの戦いがここで描写されている。対立しているように思える両者は、実はどの人間の中にも存在しているものなのだ。それゆえに、「私の内なるモモを確かめる努力<sup>(1)</sup>」だけではなく、灰色の男たちが内在していることを自覚することも重要となってくる。内なる戦いを意識化することが要請されているのだ。こうした意識化を促すために、この物語がどのような構造になっているかを確認していきたい。

### ① モモ

ある日、町に見知らぬ少女が姿を現す。彼女は施設から逃げ出してきた。その姿は「異様」(7-8)であり、「ぞっとするような」(8)ものだった。しかし、町の人々は、この薄汚い浮浪児を追い出さずに、受け入

れることにした。モモが人々に受け入れられたのは、モモが「聞くこと」ができたからである：「彼女は他の誰も真似のできないことができた。それは人の話を聞くことだった。人の話を聞くことは何も特別なことではない。たぶん読者の多くはそう言うかもしれない。聞くことぐらい誰にでもできるのだから。しかし、それは間違いだ。本当に人の話を聞ける人間は稀だ。モモの聞く能力は、唯一無二だった。モモが話を聞くだけで、愚かな人間に賢い考えが浮かんだりした。話している人間がそんな考えを思いつくように、彼女が何かを言ったり、尋ねたりしたからではなかった。そんなことは彼女はしなかった。彼女はただそこに座って聞いているだけだ。ただし、注意深くそして相手の気持ちになって。」(14-15)

モモに話を聞いてもらおうと、「賢い考え」が浮かぶのは、話すことで、心の整理がつくからである。ぼんやりと考えているだけでは形にはならない。ところが、人に話すことで客観化することができるようになり、自分の考えをまとめることが可能となる。また自分は不必要で、代替可能なちっぽけな存在だと自信を失っている人間が自分の存在が「世界にとって重要だ」(15) と思えるようになるのだ。「注意深くそして相手の気持ちになって」聞いてくれる人に話をするので、人間は自分が受け身の存在から、能動的な人間となり、主人公としての意識を持つことができるようになる。自分を認めてくれる人間がいることが確認できると、人間は安心できるのである。こうした意識が人間にとって極めて重要なのである。一般の人間は、通常現実生活において、主人公になることは稀である。ほとんど場合、力のある人間に押しえ付けられ、操作される対象になっている。時には自分の心を偽り、自分を誤魔化して、社会生活に適応しようとするのだ。ところが、他人に自分の話をする場合は、自分が主人公となる。そこに癒しが生じ、精神的なゆとりが生まれることになる。

人々は自分の生活で精一杯。大人も子供も時間に追われ、慌ただしい生活を送っている。必ずしも自分のことだけしか考えていないというわけではないが、他人の話に耳を傾ける物理的な時間もないし、精神的な余裕もない。人々は常に話を聞いてくれる人を探しているのだ。そう考えると、モモの存在の大きさが理解できるのではないか。モモは人間社会の中で生活をしているが、公的なものとの結び付きはない。社会的な責務はなく、勝手きままに自由に暮らすことが可能であり、時間も自由に使うことができるのである。時間的な束縛がないので、人々の話をいくらでも聞いてあげることができるのだ。そうしたモモに話をすることで、人々は自分の存在を確認し、自分の存在に自信を持てるようになる。モモの存在は周りの人によって不可欠なものとなり、一人では生活できないモモを皆が協力して支援することになる<sup>(2)</sup>。

彼女が聞くのは、人間の話だけではなかった：「モモは全てのものに耳を傾けた。犬や猫にも、こおろぎやカエルにも、それどころか、雨にも樹を揺すぶる風にも耳を傾けた。そしてあらゆるものが彼女に語りかけたのだ。全ての友人たちが家に帰った後の夕方、たいてい彼女はまだ長い間一人きりで古い劇場の大きな円形に組まれた石の上に座って、星の輝く空の下、ただひたすら偉大な静寂に耳を傾けた。」(21-22) 動物にも植物にも、つまり全ての自然の存在に対して心を開いている。モモは人間社会の一員であるが、社会を超えた大きな自然の中の一人であるという意識が強いと思われる。自然の中の存在であるゆえに、あらゆる自然の存在の声に耳を傾けることになる。「偉大な静寂に耳を傾け」ることは存在の根源に耳を澄ますことである。モモは、人工的な社会に暮らしながらも、それを超えた自然の営為を常に意識しているのだ。天気が悪くある日、モモは子供たちと空想物語を作って遊ぶが、そこに荒れ狂う台風を眠りにつかせる「古来の歌」(33) が登場する。そこには、本来人間と自然は心を通わすことが可能であるという考え方が反映され

ている。自然は、敵対し、制圧するものではなく、共生の対象であることがはっきり言明されている。自然との結びつきが強く、社会の動向に気を取られることはない。

彼女は年を聞かれて、「100歳」(10)と答える。みんなが驚いた顔を見ると、今度は「102歳」(10)と訂正をする。誰も彼女に計算の仕方を教えなかったことが原因だと書かれているが、彼女がただ単に計算ができないだけのことではなさそうだ。時間を数える必要を感じていなし、彼女にとって数字は意味がないのだ。時間感覚もあまりない。能率・効率を考えず、自然の悠久の流れに身を任せている。ここでもモモは社会的な存在というより、自然に近い存在と言えるであろう。

またモモは、身なり・身だしなみを全く気にしない：「彼女の髪はもじゃもじゃの真っ黒の巻き毛で、一度も櫛をいれたり、ハサミで切ったことがないように思えた。……彼女のスカートは色とりどりの端切れで縫い合わされており、踝のところまでであった。その上に、古くて、とんでもなく大きい男物のジャケットを着ていた。」(8)モモは髪型や服装には無頓着な野性児であり、自然の子。人の目をまったく気に留めていない。

人間や自然の声を聞くモモ。時間感覚がなく、計算をしないモモ。身なりに全く気を使わないモモ。こうした彼女の特徴から何を引き出すことが可能であろうか？ 彼女は朽ちはてた円形劇場に住みついた。円形劇場では、昔人々は、「別の現実」(6)を体験できた。モモは「別の現実」を体現しているのだ。モモは自然に近い存在。「別の現実」とは、自然の存在としての人間が提示されていると考えるべきであろう。他の人間は、否応なく社会に適応する必要がある、社会からの圧力から免れることは不可能。どこにも属していないモモだけが、自然の存在としての人間を体現することができるのである。そしてモモが子供であることも重要なファクター。モモは本来の子供性を体現している：「子供たちは私

たちの元来の敵。もし子供たちがいなければ、人類はとっくの昔に我々の手に落ちていた。子供たちに時間の節約をさせるのは、大人よりもはるかに難しいのだ」(128) 子供たちは自由な時間を求めている。彼らを強い力で拘束する社会活動がないからだ。現実世界で齷齪と地位や名誉や金銭や権力を得ようとしている現代の大人の対極の存在がモモによって示されていると言えるだろう。

近代の人間の歴史は自然支配・自然破壊の歴史である。そして自然の破壊は、人間の内面にも大きな影響を及ぼす。自然も他者も富を追求する際の手段と化す。物質的な富を追い求め、巨大組織に人間を閉じ込める社会体制が人間の内面の枯渇を生み出す。20世紀後半から、現実世界の在り方に対する疑念が大きくなってきた。世界的な学生による政治活動もシステムの硬直性を打破しようとする運動であった。また、環境を優先して考えようとする政党も現れた。それが緑の党である。「自然を破壊してやまない巨大な生産力とその支えになっている巨大技術、管理社会に不安を覚える『緑の人々』がもっとも共感を寄せるのは、エーリッヒ・フロム<sup>(3)</sup>である」。特に、エーリッヒ・フロムの邦訳『生きること』が重要な役割を果たしている。フロムはそこで自然を支配し、物質的な豊かさだけを追求することで、失われていく人間の内面性を問題にしている。確かに、個人が所有し、利益を得ることが制度的に保障されたのは、近代社会が獲得した権利である。しかし、そのことばかりに目を奪われると、人間性を損なう危険性があるのだ。それゆえに、自然との共生をこころがけ、他者との関係を見直すことが重要な課題となる。「愛すること、自分自身の孤立した自我の牢獄を越えていくこと、興味抱くこと、耳を澄まして聴くこと、与えること<sup>(4)</sup>」(333)を考えるべきなのである。自分の狭隘な自我に閉塞せず、自然や他者に心を開き、自然や他者と積極的に関係を持ち、自然や他者の声に耳を傾けることが課題となるのではないか。モモは直接には何も提示しない。「別の現実」の存在

を作中人物たちだけではなく、読者にも意識させる。それがモモの役割である。

モモはそれゆえある種の理想を体現している。読者がモモになる必要はない。それは不可能であろう。ただ、モモを通して、自分を見つめ直し、自己改革に取り組んでほしいとの願いが込められているように思えるのだ。つまり、モモの内面化である。モモの姿を通して、誰しもが持っている自分の中の「モモ」に気づき、その声に耳を傾けることが要請されているように思える。そして、モモは物語の進展に伴い、精神的に成長する。仲間を助けるために、全力を尽くそうとする：「モモはもう逃げようとは思わなかった。自分が助かるかもしれないと思って逃げてしまった。ずっと自分のこと、自分自身の過去、そして自分自身の不安だけしか考えていなかった！しかし、実際に困っていたのは彼女の友人たちであった。」(246) モモは、後述するマイスター・ホラの援助を受けて、灰色の男たちに立ち向かうことになる。モモが戦いに勝利することで、読者は立ち向かう勇気を得られることになる。

## ② モモの友人

モモの存在が具体的にどのように他の人々に影響を及ぼしたか確認しておきたい。モモの恩恵を最大限に被ったのが、二人の男性、ベッポとジジ。ベッポは掃除夫。彼はゆっくり話す。モモは彼の話をもじっくりそして親身になって聞くことができる。彼がモモを頼りにするのは当然の結果だった。ベッポは嘘を言いたくないので、慎重に話す。当然、時間がかかる。現代においては、変わり者になってしまう。彼は時間をかけて掃除をする：「いちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん、……つぎの一步のことだけを考えるんだ。」(48-49) 彼は現代の速いテンポに

惑わされることなく、着実に自分の責務を果たそうとする。それゆえ、時間に追われることのないモモは彼にとっては不可欠の人間なのだ。モモが行方不明になった時、一番熱心にモモのことを気にかけて、警察に連絡したのも当然のことだ。ジジは語り部。観光ガイドであるが、その仕事がいっつもあるわけではないので、いろいろな仕事をしている。話すことが好きであり、得意である。彼の空想力はモモがそばにいと倍増する。しっかりと聞いてくれるので、彼は空想力を高める「翼」(45)を得ることができたのだ。彼の想像力の産物である強欲な女王の話が紹介されている。女王は、金に変身するという魚の存在を信じてしまう。金の亡者である。これは現代社会の拝金主義に対する批判が展開されている。物語の中に物語を導入することで、2重に現実社会の問題点を指摘していることになる。

### ③ 代表して騙されるフージーさん

フージーさんは、床屋である。ある日、彼は自分の人生に疑問を抱く：「人生は終わった。俺がどんな人間になったと言うんだ？ ちっぽけな床屋、それが、俺の人生。真っ当な人生を送ることができたら、全くの別人になれるのに。……まっとうな人生のためには時間が必要。自由でなくてはならない。しかし、俺はこのままでは、一生涯ハサミ、無駄話そして石鹸の泡の囚人のままだ。」(63) フージーさんは、りっぱに社会的な責務を果たしてきた。ところが、突然のように不満を感じた。「まっとうな人生」への憧憬が頭を擡げる。しかし、「まっとうな人生」の中身は明瞭ではない。ただ漠然と今とは異なる現実を欲しているだけにすぎない。輝かしい未来を獲得するために、自己改革をしようとする人間は多い。余暇を利用して、資格取得を目指したり、会社を辞めて、大学

で自分の可能性を追求する人もいる。ところが、フージーさんはそうではない。

灰色の男たちの論理は、時間を節約し、余暇を放棄することで、「利子」がつき、そのことで未来により多くの時間が得られ、素晴らしい人生が送れるというものである。フージーさんは、この論理に屈伏してしまう。なぜ、易々と騙されてしまうのだろうか。フージーさんは、突然現状に対する不満を抱いた。自分の社会的な役割を十分に自覚し、そうした自分自身に自信を持っていない。それゆえに、生活を変えて、別の自分になりたいと望んでいる。ところが、彼には、具体的な未来の自分を持っているわけではない。これまでの生活の否定であり、「変える」という意識だけが問題となる。本来であれば、現在を活用せずに、未来を構築できるわけがない。ところが、実質的な変革ではなく、変革の意識だけが問題にされているのである。未来の自由時間を作るために、現在の自由時間を捨てることになる。本当に変えるためには、これまでの生活を変えて、未来のための時間を作り出さなくてはならない。ここでは、全くの逆。自由になるために、不自由になるという矛盾をおかしている。現在を我慢すれば、素晴らしい未来が待っているという受身の考え方がなされている。これは妄想であり、幻想であり、非現実的である。それでも彼はその樞を見破ることができずに、自由を放棄してしまう。

オンケンが主張しているように、灰色の男たちの「巧みなトリック」<sup>(5)</sup>だけで、時間泥棒が成立しているわけではない。人間の内面の弱さ、日常を変えたいという欲望が関連していることを見逃してはいけない。時間を節約することで、生活に変化が生まれる。その変化は自分を貧しくするものにも関わらず、フージーさんはそれを未来への良い兆候だと見做してしまっているのだ。社会的な役割を果たすことは、本来決して「囚人」ではない。彼はそれなりに満足していたはずである。近代社会は役割分担で成立している。皆が好き勝手にやりたいことをやれば成立しな

くなる。そんなことは彼も分っているはずである。ところが、フージーさんはそうは考えないという設定にしてある。彼の客扱いは変わってしまった。余分なことは喋らず、30分で終わる仕事を20分で終えるようにしたのだ。髪を切るだけで、会話がなくなってしまった。会話は彼の個性である。その個性を自ら捨ててしまうことになる。それゆえに、仕事は単なる社会的な責務となり、味気ないものになってしまったが、彼は仕事の効率を高めて時間を節約することしか念頭になかった：「このようなやり方の仕事をしていても彼は少しも楽しくなかった、しかしそんなことは今やもう重要ではなくなったのだ。」(75) そして、仕事以外の日常生活にも変化が生じる。老人ホームにいる母親を訪ねる回数も減らし、ペットを手放し、就寝前の反省の時間をカットしてしまったのだ。自分の大切な私生活の時間を減らせば、それだけ内面はどんどん貧しくなり、結果的に「内的適応が悪い人」<sup>(5)</sup> になってしまう。自分自身と向き合う時間を少なくしてしまうと、個性が摩耗してしまい、規格品の機械のような人間になってしまうことになるのだ。フージーさんがしていることは、外の環境の要請や期待に過剰に適応しているにすぎないのだ。しかし、そのことを本人は気付いていない。輝かしい未来が待っていると思いついでいるからである。そしてこの物語では、フージーさんの一例が、普遍化され、全ての人間が時間を節約することになるという設定である。他の人々の内面の変化については言及されていない。ではなぜフージーさんが選ばれたのであろうか？ フージーさんは床屋。モモは髪の毛を全くケアしない。この対比は意味があるのではないか。フージーさんもベツポも、同じように、社会的な責務を果たしているのに、ベツポは社会的な意味を確信しているが、他方フージーさんは、疑問を持つ。この物語では、モモとの対比で床屋のフージーさんが自分の社会的な責務に疑問を抱くのは構造的に必然的なのである。

#### ④ 灰色の男たち

灰色の男たちは、フージーさんを始め、人々を籠絡することができた。この男たちの実態とは何なのだろうか？ 灰色の男たちは、時間の貯蓄を勧めている。輝かしい未来のために、今使える時間を使わずに、貯めるようにしむけている。人々は仕事をする時には、無駄を排除し、能率・効率を心がけるようになった。近代社会は、こうした能率・効率の考え方を推し進めてきた。人々は、自分の未来のために時間を節約し、時間を貯蓄していると思込んでいるが、実は社会の要請に従っているだけなのである。灰色の男たちは、こうした能率・効率を推進している社会精神を体現していると思われる<sup>(7)</sup>。結果的に、人々は個性を喪失し、社会の担い手ではなく、社会の単なる道具となってしまった。そして、大きな問題は、そういった状況に陥っても、人間は抵抗できないのだ。自分であれこれ考えるより、社会の要請に従っている方が安心できるのだ。人々は自分の内面が貧しくなっていくことに気づいていない。時間を貯めていく過程で、自分自身をなくしていくことになるのだが、決まりきった生活の方が考えなくて済むからである。全てが同じようになる。町も、建物も、人間も。規格通りの統一された生活形態。人々は飼い慣らされていく。「秩序の砂漠」(78)が現出することになるのだ。余分な時間を捨てるということは、自分らしさ・個性を捨てることになる。ロボットになる、機械になるということではないのか。灰色の男たちが時間を盗んだという形になっているが、本当は、人間が自ら自由になる時間を捨てているのである。しかし、もはや誰もそのことを考える力もなくなしてしまったのだ：「時間を貯めることで、実際は全く別のものを貯めていることに誰も気付いていないようだった。自分の生活がだんだん貧しく、画一的になり、そして冷たくなっていることを誰も認めようとしなかった。」(78)

人間は社会の中でしか生きることにはできない。しかし、社会に規定されながらも、社会の担い手として社会を構築することができるはずである。ところが、社会が巨大化・複雑化し、個人は社会構築への意欲を持つことが難しくなっているのが、現状ではないか。社会の要請に人々が弱くなるのは当然のことである。そうした現状がここで表現されているように思える。自由時間が人間を育てる。時間に余裕がなければ、機械になるだけである：「時間とは生きることである。そして生きるとは心を持つことである。人間が時間を貯めれば貯めるほど、それだけ一層人々は時間がなくなり、心が貧しくなるのだ。」(78) ただ、そのことに人々は気がつかない。

## ⑤ 時間を取り戻すために

作中人物たちは時間の重要性を理解していない。自分たちが時間を節約することで、社会の奴隷になっているのに、気付いていない。これは深刻な状況である。そこで、どうしてもその事情を知っている人物が必要となる。マイスター・ホラが登場することになるのだ。ホラの役割は、ただ単にモモを援助するだけではなく、人間自身が自覚していない時間の大切さを読者に教えることにある。人間たちは「病氣」にかかってしまったのだ。しかし、彼らにはその自覚がない：「最初、人々はそのことを余り気にしていない。彼らはある日、何もする気がなくなる。何事にも興味を持たなくなり、内面が枯渇していく。……人々はますます不機嫌になり、内面が空虚になっていく。そして自分自身や世界に対して不満を抱くようになる。その後、それどころかそうした感情すら次第に消えていき、人々は何も感じなくなるのだ。人々は何事にも関心を抱かず、何かをする意欲もなくなり、全世界が無縁の存在となり、興味の対

象とはならなくなる。もはや怒りも感動もなくなり、喜びも悲しみもなくなり、笑うことも泣くことも忘れてしまうことになる。そうなると、人々の心は冷え切り、もう何かを愛したり、誰かを好きになることもできなくなる。そこまで来ると、この病気は治らなくなるのだ。」(269)そして、人間たちは無力なのだ：「私は人間が自分たちの手でこの亡霊たちから自由になることを期待していた。できるはずだ、というの、彼ら自身が亡霊たちを生み出したのだから。しかし、もう待てない。私がいなくてはならない。」(270)

時間の「管理者」(176)として登場するホラは「管理者」とされているが、時間が盗まれることを阻止することができない。時間の管理は人間がすべきであり、人間に時間を取り戻してやり、時間に対する自覚を促すのが彼の役割なのである。時間の大切さを人間が自覚していない以上、ホラ以外の誰もそのことはできないのだ。

社会システムは複雑化し、巨大化し、個人の力は消滅してしまったかのように思われる。特に日本のような縦社会では国民の自覚は希薄である。しかし、そこで諦めてはいけない。モモがホラの助けを借りて、一人で灰色の男たちに立ち向かっていったように、我々には潜在的にそうした可能性を秘めていることを十分に認識すべきであろう。この物語は我々が完成させなくてはならないのだ。人間が主に私生活を犠牲にした時間から生まれた灰色の男たちが、人間の内面を貧しくさせるのは当然の帰結である。ホラはモモに時間の大切さを説いている。読者はホラによって時間の大切さを再認識できるような構造をこの物語は有していると言えよう。では作中人物の成長はどうであろうか？ モモは確かに精神的に逞しくなった。しかし、モモやホラに救済されて、人々は時間の大切さを自覚できるようになったのであろうか？ 作中人物たちは、自分たちのしていることを意識していない。救済されたという自覚も生まれてこないのだ。時間節約の論理に籠絡されたフージーさんはどうだろ

うか。彼は、自分の社会的な責務を実感できず、自分を過小評価し、漠然と「違う自分」を夢見て、現在を捨ててしまった。彼の時間が戻ってきて、彼は日々の生活に充実感を得ることができたのであろうか？ そうした描写はされていないし、そもそもそうしたことを描写することはできない。フージーは何が起こったか理解できていないので、彼の成長は問題にならないからだ。これが、この物語の本質である。この物語は物語内では完結しない。開かれた形で終わる。この物語を終わらせることができるのは読者だからである。この物語は虚構世界での出来事を読者に紹介し、読者の成長を問題にしている。読者がこの物語を通じてモモの成長を実感することで、時間の大切さを自覚し、成長することがいわば要請されているのである。管理・操作されやすい人間たちが大量に生産され、私たちは規格品になっている。社会生活をしている以上、その社会の影響から逃れることはできない。そのことを自覚し、自分たちの意志を反映させる社会を構築できるように努力するに働きかけることが目的なのである。モモもホラも灰色の男たちも、また他の作中人物も私たちの「中」に存在している。問われているのは、私たちの中に住んでいるモモやホラの声に耳を傾け、灰色の男たちの囁きに負けないことであろう。ただ、この課題はそれほど容易なことではないことは確認しておくことも必要であろう。私たちは弱いという自覚をしっかり持つべきだ。人間は社会的動物であり、人間は成長するまでに長期間にわたって他者に依存をする。社会がなければ、生きていけないからだ。この物語は、20世紀後半の大衆化し、群集化した社会に対する危機意識から生まれた作品である。無力感に苛まされている人間に少しでも勇気を与えることができればという願いから生まれた作品と言えるであろう。

## 註

テキスト：Michael Ende: *MOMO oder Die seltsame Geschichte von den Zeit-Dieben und von dem Kind, das den Menschen die gestohlene Zeit zurückbrachte*, Thienemann (引用後の数字は、このテキストのページ数を示している。)

- (1) 子安美知子：『「モモ」を読む』、新潮文庫、p. 21.
- (2) 村上春樹も聞くことの重要性を把握している作家である。彼の小説『1973年のピンボール』の主人公は人の話を好んで聞いた。「一時期、十年も昔のことだが、手あたり次第にまわりの人間をつかまえては生まれ故郷や育った土地の話聞いてまわったことがある。他人の話を進んで聞くというタイプの人間が極端に不足していた時代であつたらしく、誰も彼もが親切にそして熱心に語ってくれた。見ず知らずの人間が何処かで僕の噂を聞きつけ、わざわざ話しにやっ来てたりもした。」(『1973年のピンボール』、新潮文庫、p. 5) 慌ただしい現代生活の一面がここに表現されているように思える。村上春樹は、『アンダーグラウンド』ではさらに一步進めて、きわめて画期的なことをしている。この作品は、オウム真理教の被害者の声を集めたものである。彼は、その際、自分の立場をよくわきまえている。「これまで私は、自分は生意気で身勝手なところはあるにせよ、決して傲慢な人間ではないと考えてきた。しかし『自分の置かれている立場は、好むと好まざるとにかかわらず、発生的にある種の傲慢さを含んでいるものなのだ』という基本認識をより明確に持つべきだった、今では反省している。たしかに地下鉄サリン事件によって深い傷を負った被害者の方の気持ちからすれば、この本を書いている私は『安全地帯』からやってきた人間であり、いつでもそこに戻っていける人間である。そんな人間に『自分たちの味わっているつらい気持ちがほんとうにわかるわけではない』と言われても、それはしかたないと思う。まさにそのとおりである。わかるわけないと思う。しかし、かといって、そこでそのまま話がぷつと終わって、相互的なコミュニケーションが断ち切られてしまったら、私たちはそれ以上どこにもいけないだろう。あとに残るのはひとつのドクマでしかない。そのとおりでありながら(そのとおりであることを相互認識しながら)、あえてそれを越えていこうと試みるところに、論理の煮詰まりを回避した、より深く豊かな解決に至る道が存在しているのではあるまいかと考えている。」(『アンダーグラウンド』、新潮文庫、p. 763) 村上春樹は、自分が「安全地帯」からインタヴューをしていることは理解している。しかし、それでも彼は人々の話を聞こうとした。人々が話せる機会を作ろうとした。被

害者や遺族は何の咎もないのに、偶々犠牲になってしまった。そこには明確な因果関係は存在していない。理不尽・不条理そのものである。しかし、人々は話すことによって、不条理に翻弄された受け身の存在から、自分の視点から事件を回想することで、自分をいわば「主人公」にすることが可能となり、呪縛された存在から解放される可能性を持つことになるのだ。それゆえに村上春樹は手を差し伸べ、連帯しようとしたのである。他者への積極的な働きかけの重要性を知っているからである。

- (3) 永井清彦：『緑の党』、講談社新書、p. 171.
- (4) Fromm, Erich: *Gesamtausgabe Band II Analytische Charaktertheorie*, Deutscher Taschenbuch Verlag, S. 333.
- (5) ヴェルナー・オンケン：『経済学者のための「モモ」入門』、自由経済研究第14号、p. 9.
- (6) 河合隼雄：『無意識の構造』、中公新書、p. 103.
- (7) 子安美知子は、灰色の男たちが物質主義を体現していると解釈している：「彼らは、まさしく物質主義、物量主義的価値観の代弁者です。」（『「モモ」を読む』、新潮文庫、p. 84）灰色の男たちは、自然存在を体現しているモモの対極の存在。それゆえに、彼らを物質主義と解釈することは間違いではないだろう。しかも、エンデ自身もそういう発言している：「灰色の男たちは、こまぎれ、分解の原理です。彼らにとっては、計算、計量、測定できるものしか現実性をもたない。計量思考を代表しているのです。」（『エンデと語る』、朝日選書、p. 123）しかし、この物語では、時間の節約、時間の貯蓄が前面に出ている。時間の節約の論理の背後に、物質主義が存在していることは確かだが、灰色の男たちは、直接的には能率・効率を体現している考えた方が適切であると思う。フージーさんの例でも分かるように、時間を節約すると、他者や自分自身とのコミュニケーションの時間が少なくなる。物事を考える暇が少なくなる。そうなれば、社会の要請に従うだけの歯車でしかなくなり、人と人との結び付きも弱くなるし、全体を見渡す能力も失くし、社会構築の担い手であるとの自覚も意欲も少なくなる。人々の内面は枯渇し、操作する権力の道具・ロボットになってしまうことになる。時間の効率化が人間の機械化・画一化を招いていることを重視すべきであると思う。人間が人間らしく生きるためには自分の時間が必要なのだ。まさしく、「時間とは生きることである。」(78)

